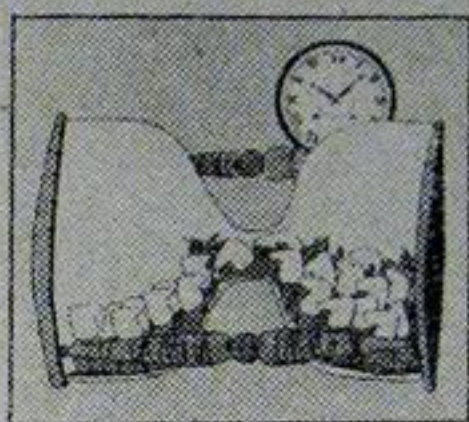


子供たちの午後 R・A・ラファティ (井上央訳) 青心社 (2/10刊・960円)

子供たちの午後

R・A・ラファティ 井上 央訳



Seishinsha

ラファティは、クレージー・アイデアの作家だ、という人がいる。筒井康隆やかんべむさしに例える人もいる。昨年、ようやく出版された短篇集『九百人のお祖母さん』で、日本での評価はさらに高まった。しかし、それを含めても、邦訳の作品三十数篇、せいぜい短篇集二冊分にすぎない。雑誌掲載などで手に入らないものも少なくない。

本書は、独自に編まれ、初訳十一篇を取めた、ラファティの作品集である。

初期作を中心にまとめている。ちょうど『九百人——』の姉妹篇ともいえる時期の作品だ。翻訳権などのからみから、七〇年以降のものや、単行本収録作は外されていて、そういう意味では、アメリカ本国でも入手困難な

内容なわけだ。この作者のちよつと違った面も見て取れる。

処女作「氷河来たる」、ある日突然氷河期が訪れ、人類社会は大混乱に陥るという(SFなら)当り前すぎる設定。それを、ある日突然の理由を説明することなく、書いていく。確かに、異色のデビューである。一步誤ると、単にバカバカしいだけに終る話が、微妙なバランスを保って、独特の雰囲気を残している。——ラファティは、ここから始まった。今でも、本質的には同じだろう。

比較的理づめな、英米SFの中で、表面の論理にこだわらないラファティは、やはり異質な部類に入る。そこが、より自由な、日本の筒井、かんべあたりと比べられる所以だろう。しかし、一般の読者を着実に獲得していた日本作家とは違って、ラファティは時代に乗れなかった。一般誌への進出も、ほとんどはたせなかった。

とにかく分かりにくい作家だ。作品が難解というのではなくて、全体を統べる作者の姿勢が分かりにくい。

例えば、本書の短篇群——アダムには三人の兄弟がいて、その子孫は、アダムの子孫(つまり人類)を騙しながら生活している「アダムには三人の兄弟がいた」。宇宙で一番不運な男と、宇宙で一番の美女の結婚が生む悲喜劇「究極の被造物」。地球の歴史を血塗られたものに変えた、子供たちの遊び「子供たちの午後」。犯罪のない星の秘密「ブディーン

ディアの礼儀正しい人々」。夢の世界を描いた幻想的一篇「彼岸の影」。

これらには、さまざまなテーマが見出せる。我々の歴史の裏には、全く別の人々がいて、人類を好き勝手に翻弄している。これなど、ラファティお得意のテーマで、文明批評にも一部つながるだろう。奇妙な出会い——宇宙で一番退屈な星で、一番の美女と出会う男。皮肉な結末——生まれてくる子供たちの姿は……。不気味な味のある結末だ。ナンセンスだけを狙ったわけではない。発表の舞台が、同じタイプの専門誌だったことを考えると、この多彩さは、なんとも不思議だ。だからでもないが、ラファティの短篇集は、一息に読まない方がいいかも知れない。

ラファティが、これから先、大量に翻訳される見込みというのは、今のところほとんどない。なにしろ、日本語に移すのが、非常に難しい作家で、特に長篇は期待薄だ。しかし、ともかく、ここに二冊の短篇集が出版された。ラファティという「謎」に迫る鍵が開かれたわけだ。

本書には、訳者による長篇全ての詳細な解説と、全著作リストがついている。貴重な資料といえる。なお、青心社のこのシリーズは、今後、デーモン・ナイト、エドモンド・ハミルトン、ヘンリー・カットナー、ロバート・F・ヤングの各短篇集が続く。四〇〜五〇年代SFの雰囲気を味わいたい向きには、最適のシリーズだろう。